

やはり奉仕部にくる依頼はどこか間違っている。

クルル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

時間軸は、やはり俺の青春ラブコメは間違っている。 続の最終回後となります。

この話は少し刺激が欲しいな？って思ってる人に楽しんでもらえたらなと思って書きました。

少し変わった依頼を奉仕部にもってくるという内容になっております。

目次

1章 七不思議

一話【始まり】

1

二話【恐怖心】

3

三話【七不思議】

10

1章 七不思議 一話【始まり】

人は興味があることに関しては、欲を出す生き物だ。例えそれが危険だと分かっているとしても怖いもの見たさ、なんて言葉が存在するくらいに危険だと分かっているとしても欲を優先してしまう。それが高校生という、年齢を考えれば話の中心にもなれる話題を持っている事はグループの中心にもなれる最大の武器にもなる。

そしてその武器は、鮮度も命のわけだが。現在奉仕部に入ってきて目を輝かせている女子生徒は依頼をしにきたわけだ。

「…もう一度聞かせてもらえるかしら？」

あまりの内容に我が部の部長である雪ノ下は、聞こえていたはずだが目の前に座っている女子生徒に聞き返した。その言葉の裏には、聞き間違いよね？と頭痛がしているのだろうこめかみをおさえている。いつもならニコニコと笑っている由比ヶ浜すら苦笑いである。目の前の女子生徒がいかにもぐわなない依頼をしたのか明白である。

「ですからこの高校の七不思議を調べて欲しいんですよ！」

少し声を大きくして伝えてきた言葉に雪ノ下は呆れているし、由比ヶ浜はそんな雪ノ下の表情を見ながらなんとか依頼人のフオローをしようとしているが支離滅裂なフオローの内容で余計に雪ノ下を混乱させている。

「悪いけれど貴女の依頼を受けるわけにはいかないわ。そもそも七不思議を見つける依頼なんて貴女はどうして知りたいのかしら？」

当然のように依頼を断る雪ノ下。流石に由比ヶ浜もフオロー出来ないのか苦笑いしか浮かべられていない。

「えー！受けてくれないんですか？」

そもそもこの生徒は、一色と同じクラスらしい。別に一色が奉仕部を紹介したわけでは無いらしいが、女子生徒の口から一色と同じクラスとしか言われなかったのだ。今になってみれば可笑しな話でもある。最初は不思議に感じなかったのが不思議なくらいだ。俺達奉仕

部は、目の前の女子生徒の名前を知らない。それもその筈だ。自己紹介を受けていないのだから。本来なら何年何組のという感じて紹介から始まるのだろうがいろはちゃんと同じクラスメート。という始まり方だった。つまり情報が全くといって良いほど目の前の女子生徒にはなかった。その事実によ比ヶ浜も雪ノ下も違和感を覚えている様子が無いことが更に不気味に感じてしまう。

「その依頼を受けるか受けないのか。それを話す前になんだが、一つ聞いてもいいか？」

「はい、何でしょうか？」

この言葉に女子生徒は、なんて答えるのだろうか？答えてくれるのだろうか？それとも濁されて終わるのだろうか？それでも聞かなくてはいけない。そんな気持ちだが、八幡の中の警戒鈴が過去一番で警告を鳴らしている。

「——お前は誰だ？」

女子生徒の口角は少しずつ上がり、先程も笑っていた筈なのに今では、歪などこか気味が悪い笑みを浮かべていた。

二話【恐怖心】

八幡の質問の意味を汲み取った雪ノ下の瞳が大きく見開かされる。雪ノ下も気づいたのだろう。現在進行形で起きている不思議な事態に。そして現状でも気付く気配の無い由比ヶ浜を実際に見て、雪ノ下の表情から余裕が無くなっていた。どこか緊張した面持ちになり女子生徒の返答を待っている。

「え？なにになに？ゆきのん何かあったの？ヒツキーもいきなり変な質問してるし」

この状況でも気付けないのは、短に由比ヶ浜の頭の中が残念なだけなのか判断がつかなくなつて来そうなので無視である。無視された由比ヶ浜は、憤慨しているが雪ノ下も今は由比ヶ浜に構っている余裕が無いのか静かに女子生徒を見ている。

「ふふ、調べてくれないのに私の事を話せだなんて。言うと思いますか先輩？」

その喋り口調はあざとい後輩を思わせるが、先程から笑っている表情が怖いとさえ思っている八幡は、神経を逆撫でされている気分だった。それは、雪ノ下も同じなのか右手で左腕を抱いていた。由比ヶ浜だけはいつも通りだが、そのいつも通りの様子が何故かおかしくも見えってしまう。

「ゆ、ゆきのん顔色悪いけど大丈夫？」

「っ！触らないで！」

由比ヶ浜に肩を触られた瞬間雪ノ下の叫び声が部室に反響した。息を切らしながら由比ヶ浜を完全に否定した雪ノ下は、後悔の念を持ったまま謝ろうとしているがその言葉が出る前に由比ヶ浜は部室を飛び出してしまふ。

「ゆい…がはまさん」

消え入りそうな声が由比ヶ浜に届くことは無いだろう。由比ヶ浜の走り去る前にハッキリと涙が見えた。今の雪ノ下の気持ちは、恐らく八幡にしか分からないだろう。由比ヶ浜からしてみれば急に雪ノ下の体調が悪そうに見えて心配で近付いたら拒絶された。それは、友

達のいなかった八幡には到底理解が及ぶことの無い苦しみと哀しみなのだろう。雪ノ下も後悔の念に刈られ呆然と立ち尽くしている。

「これでは、依頼する状況ではありませんね。私は失礼します。きつと見付けてくれることを期待していますよ」

それじゃあ。という声を最後に女子生徒は奉仕部を出ていく。残ったのは、意味の分からない恐怖心と由比ヶ浜に対する後悔だけ。

「雪ノ下、あれは仕方ないと思うぞ？俺だってあの状況で声かけられてたら飛び退いてたと思うし」

「… 慰めてくれているのかしら？でも、そうね… とても怖かった。というより気味が悪かったわ」

少し落ち着いたのか椅子に座り深呼吸をする雪ノ下。今雪ノ下は何を思い、何を考えているのだろうか。由比ヶ浜に謝ろうとしているのか、七不思議を見つけようと思っているのか。八幡には分からない。だが最後に言った言葉。見付けてくれることを期待していますよ。この言葉の意味が八幡には、胸の中でずっと引っ掛かっていた。

「由比ヶ浜はどうするんだ？流石にこのままってわけにはいかないだろう？」

「そうね… ちゃんと謝るわ」

そんな状態で謝れるのか？そう聞こうとしたが雪ノ下の瞳には、ちゃんと覚悟が見えていた。これなら大丈夫だろうと、八幡は帰ろうと出していた本を鞆にしまい立ち上がる。どうせこの分では、奉仕部の活動は出来ないだろう。そう思い帰ろうとすると雪ノ下から、声がかかる。

「その… 出来れば着いてきてくれないかしら？」

「は？」

雪ノ下は、由比ヶ浜に連絡したあと八幡を含めて、雪ノ下のマンションに集まり事の顛末を話す事になった。八幡も一緒にというのは、短に一人で帰るのが怖いのが見て取れたが先程の後では仕方がないと、特に聞かずにその案に了承した八幡は、雪ノ下と共に由比ヶ浜がマンションに来るのを待っていた。

ピンポーン。という音が鳴り由比ヶ浜が来たと思った雪ノ下は、マ

ンション入口のオートロックを外そうと思ひ画面を覗くと声にならない叫び声を上げてその場に倒れていた。雪ノ下の叫び声に慌てて雪ノ下に駆け寄ると両肩を抱いて震えていた。画面には何も写っていないが雪ノ下が見たときには、写っていたのだろう。それも今日トラウマになった人物が。

雪ノ下の頭を優しく撫でる。今の八幡にはこれくらいが精一杯だった。それでも雪ノ下は、八幡の制服の袖を掴み涙を流す。落ち着くまでは、と雪ノ下の頭を優しく撫でているともう一度ピンポンと音が鳴り響いた。雪ノ下は、腰が抜けているのか立ち上がれそうになり。家主ではないが許してくれるだろうと画面を覗くと由比ヶ浜が見えた。画面越しからでも赤く腫れぼったくなっていると分かる目は、真っ直ぐにマンションに注がれている。

「雪ノ下。由比ヶ浜来たからオートロック解除するけどどれ押せば良いんだ？」

「右上のボタンを押して、それで開く筈だから」

覇気の無い雪ノ下の声を聞きながらボタンを押すとオートロックの扉が開き由比ヶ浜が中に入ってくる。未だに制服の袖を掴んでいる雪ノ下に離れた方がいいだろう？と聞くが下を向いてうつ向いてしまつて返事が返つてこない。無理矢理話す事は出来るが、それは良い策ではないだろう。今の雪ノ下は、誰の目から見ても雪ノ下ではなかった。

コンコンと控えめにノックされた扉を開く為に玄関まで移動しようとする雪ノ下もそのままついてくる。これから謝らなくてはいけないのに、謝る本人がこれでは上手くいく気がしない。由比ヶ浜だって雪ノ下とは仲直りしたい筈だ。だから、雪ノ下が話さない分八幡が変わりに話せば問題ないのだろう。だが雪ノ下は、それでいいのか？普段の雪ノ下なら絶対に許さないだろう。そんな確証が出来るしまうほど雪ノ下は負けず嫌いでもあるのだ。八幡が話すことによつて雪ノ下の自尊心は傷付くのか？それは雪ノ下の今までの努力を無為にしてしまう事にならないか？

「… 比企谷君」

そこまで考えて震えた雪ノ下の声を聞いて考えることを辞めた。今の状況で最も最悪なのは雪ノ下の自尊心が傷つく事とか、今までの努力を無為にしてしまうとかそういう話ではない。由比ヶ浜という雪ノ下の『友達』がいなくなってしまうことが一番の最悪だった。それに比べれば後で雪ノ下にどう言われようがどう思われようが些細なことだ。

「よお、由比ヶ浜」

「や、やつはろ…二人とも」

何も返せないでいる雪ノ下の行動に勘違いしたのか由比ヶ浜が瞳に涙を浮かべている。このままでは不味いと思い、震えている雪ノ下の変わりに八幡が代弁した。

「悪いが由比ヶ浜。中に入ってくれるか？外が怖いらしくてな」

「え？…外が怖いって？」

嗚咽混じりの由比ヶ浜の声を半ば切り上げて由比ヶ浜の腕を引いて中に入れ鍵をかける。その瞬間だった。

「由比ヶ浜さん、本当にごめんなさい」

雪ノ下が八幡から離れて由比ヶ浜に抱き付きながら謝罪したのは。

「ゆきのん…あたし、ゆきのんに嫌われちゃったんじゃないかって」

「馬鹿ね。そんなことある筈無いじゃない」

実に狙い通りではないが仲直り出来て安心するが目の前で百合百合されるのは厳しい。正直雪ノ下の家から、帰らなくては行けないので怖くないと言えば嘘になる。それに時間も遅く現在は夜7時をさしている。時間もないので説明だけはしておきたいので、この場所にいるだけでも辛いが無理矢理でも話しかけることにした。

「そろそろ今日の本題を話さないか？」

八幡の言葉に雪ノ下と由比ヶ浜は少し離れリビングに戻ってくる。雪ノ下は何故か目線で、着いてきなさいと指示すると紅茶を三人分淹れ始めた。恐らく話をする前に作りたかったのだろう。およそ自動販売機で売られているよりも気品が高く、匂いも濃厚で実際高いであろう茶葉を仕様し雪ノ下の洗練された紅茶は絶品である。

「さて、それでは今日何があったのか話すわ」

雪ノ下の目は真剣で真っ直ぐで、そして八幡と由比ヶ浜を一つのソファで三人座っている。雪ノ下が真ん中なのだが八幡にとっては、居心地が良いとは言えない。由比ヶ浜はチラチラと此方に視線を向けてくるし、雪ノ下との距離はゼロだ。つまり肩が触れている。そこまですていないと落ち着かないのか、この状況になったところでもいつもの雪ノ下らしく覇気のある声に戻ったので仕方ないと自分に言い聞かせ、由比ヶ浜から送られてくる視線には目をそらすことで無視することにした。

「その前にだ、雪ノ下。一つ確認しなければいけないことがある。この話を由比ヶ浜が聞くかどうかだ。聞かないで理解しているのなら何も怖いことはない。俺とお前が最初そうだったようにな。でも知ってしまえば由比ヶ浜だって俺達と同じ恐怖心を味わうことになる」

「そうね…無理にする話ではなかったわね。ごめんなさい。私の中でも、まだ整理がしていないのよ」

いつもの雪ノ下なら気付けたであろうことに気付けないのは、頭の中で本当に整理がついておらず混乱しているからだろう。八幡だって最初から冷静だった訳じゃない。だからあの時雪ノ下に分かるように説明したし、そのせいで雪ノ下を混乱させてしまっている。由比ヶ浜が分かっているのは、本当に運が良かったからだろう。

「あたしは、聞きたいな。二人がどうしてそんなに怯えてるのか分からないし、それに、ゆきのんが…大切な『友達』がこんなに辛そうなのに、あたしだけが何も分かってないなんて嫌だよ…」

「由比ヶ浜さん…」

由比ヶ浜の決意も固く、雪ノ下も頷いてる。由比ヶ浜にこれだけ言われたら話さない訳にもいかないだろう。

「それじゃあ説明するが、順を追ってだな。由比ヶ浜、今日の放課後女子生徒が奉仕部に入ってきたらどう？」

「うん。いろはちゃんのクラスだって言ってたね」

そう、そもそもそこがおかしい。依頼をしに来る。つまり、頼み事を自分より年上の先輩に頼むのに自分の名前を言わないなんてどう

考えても可笑しなことだ。そして一番おかしいのは、誰の目からも明らかにおかしなことなのに、おかしなことだと認識するまでおかしなことだと思えなかったことだ。それを由比ヶ浜に伝えるには、おかしなことを理解してもらう必要がある。

「由比ヶ浜は、女子生徒の名前を知ってるか？」

「そんなの女子生徒ってあれ？」

「そう。俺達は知らないんだよ。そいつの名前を」

名乗られてないからな、と付け加えて説明すると、由比ヶ浜も今まで不思議に思わなかったのが不思議に思えて来てるようで顔に焦りが見えた。

「で、でも！ただ言い忘れてただけかもしれないし！」

「由比ヶ浜さん。それは有り得ないわ」

そう。何故なら雪ノ下は、知らない相手が依頼に来たときには名前とクラスを聞いてるのだ。今日の事を思い出そうとしても何故か雪ノ下が女子生徒の名前を聞いたのかどうか思い出せないのも不思議だが、今はそれよりも話さなくきやいけないことがあった。

「それに雪ノ下。さつき何を見た？」

八幡の言葉で目に見えて動揺する雪ノ下は、紅茶をゆっくりと飲み込み、深呼吸をしてから話し出した。

「私が見たのは、笑顔で此方を見つめる。今日の依頼人の姿だったわ」
予想はしていたが、実際に見た雪ノ下としてはたまったものではないだろう。由比ヶ浜も顔を蒼白とさせ体も震えている。八幡自身も、今から帰らなくてはいけないのだ。正直言えるなら泊めてほしいと頼みたいくらいだった。時計の時間を確認すると時刻は8時をさしていた。これ以上遅くなるのは避けたいため、立ち上がる。

「…どこに行くの？」

掠れるような雪ノ下の声に一瞬座ろうと思ったが流されて同い年の異性の家に泊まってしまったなんて事実、世間は許してはくれないだろう。特に雪ノ下陽乃が黙っていないだろう。小町に同じような奴がいたとしたら、許さない自信があった。

「帰るんだよ。そろそろ帰らないと、危ないしな」

怖いとは、流石に言えずに遠回しの言葉になってしまう。

「別に… 今日くらい泊まっていつでも構わないのだけれど…」

「いや、それはまずいだろ」

雪ノ下が泊まりの提案をするなんて、普段なら有り得ないだろう。だが少なくとも女子生徒は、雪ノ下の住んでいる場所を知っていた。それは、家の前まで来たので確かである。だが、それでも八幡がここに泊まるわけにはいかない。

「あたしは… ヒツキーなら良いよ？」

何が良いんだよ、心揺らいじやいそうになるだろうが。確かにこの状況で女子二人を置いていくのは忍びない気もしたが、八幡の中にある自意識が泊まりだけは駄目だと言っている。それにポケットの携帯が震えていることから小町からの電話だろう。帰りが遅くなると言ってはあるが帰らないとは言っていない。

「お前らが良くて、俺が良くねーんだよ。小町から電話来たみたいだしな」

電話に出ると小町ではない女性の声が聞こえてくる。聞き覚えのある声だった。普段から聞いているようで聞いていないような、というより母さんだった。

《八幡！あんたこんな時間まで小町一人にしてなに遊んでるの！遊びに縁がなかったあんただから、安心してたのに。不良になっちゃったの？お母さん悲しい！》

この無駄にハイテンションなのは、間違いなく母親だ。小町そっくりというか、小町が似たのだろうか、ほんと父親に似なくて良かったとさえ思うときがある。仕事の都合上滅多に帰ってこない母さんが家に帰ってきている。いつもなら気にもしないが、今日はいてくれるだけで安心感が違う。

「今帰ろうとしていたとこだから。それに滅多に帰ってこない母さんだっけ悪いだろ？」

この時八幡は気付くべきだった。両隣に悪魔のように微笑む雪ノ下と由比ヶ浜がいることに。

三話【七不思議】

車が走る揺れを感じられないほど八幡は固まっていた。夜の9時を過ぎた頃に母さんが雪ノ下のマンションまで迎えに来てくれたお陰で歩いて帰るといふ恐怖を味わう事なく帰れているが、先程から両肩に当たっている重みに意識が向く度に心臓が跳ね上がっていた。正直心臓に悪いので無心になりたかったのだがこうなつた原因を作つた一人である由比ヶ浜が話しかけてくるものだから無心にもなれなかつた。恥ずかしさを紛らわそうとしているのだろうか、されている方は冗談じゃなかつた。もう一人は、もう一人で無心。かちこちに固まっている雪ノ下なんてレアだが、それなら何故八幡を真ん中に座らせたのか不思議に思っていた。窓際なら、窓際に寄ることも出来るのだが二人に挟まれていては、寄ることも出来ない。強いて言えば若干雪ノ下の方に余裕があるので雪ノ下の方に寄つているというくらいか。

車を現在運転しているのは、母さんである。そして母さんの隣でニコニコしながら此方を見ているのは世界一可愛い小町だ。何が楽しいのか先程からずっと見ている。本来なら八幡が助手席に座ろうとしたところで小町が乗っていたのでこんな乗り方になつてしまったのだ。

そもそも……

「どうして小町まで連れてきたんだ？」

「お母さん！お兄ちゃんが冷たいよ！小町は邪魔なんだつて！」

そんなことは言つてないだろ!?!そういう前に八幡の言葉は母さんによつて区切られる。

「そりゃあんた小町も連れてくるに決まつてるでしょ？不審者がもしうちに来たらどうすんのよ？」

そう言われるとなにも言い返せない。雪ノ下と由比ヶ浜は、八幡が電話している最中に隣から電話を無理矢理奪い取り何かを母さんに話していた。何かとは、恐らく不審者に付きまとわれている、等だろう。だからか、何故か二人ともうちに泊まるらしい。どうしてこう

なつた？雪ノ下に聞けば、小町さんの家に泊まりに行くだけよ？別に貴方の家に泊まりに行くわけでは無いのだけれど。と言われ。由比ヶ浜には、えーと、ほら！怖いじゃん？である。意味が分からない。

兎も角、小町の家は俺の家ではないらしい。何それ悲しくなる。

「それに、あんたが守るなら一緒にいなさいな。折角頼ってくれてるんだから、男だったらシャキツとしなさい」

「そうだよお兄ちゃん。結衣さんと雪乃さんには、お世話になってるんだから。こんなときくらいお返ししなきゃだよ！」

女所帯の車の中で、八幡に味方はいない。それに母さんと小町に嫌われたら家の居場所は無くなるだろう。今日も帰ってきていない親父も喜んで送り出すことだろう。

「その、不躰なお願いを本当にすいませんでした。こんな夜分遅くなるのに」

「あ、あのー！すいませんでした」

雪ノ下に続いて由比ヶ浜も母さんと小町に謝罪する。

「良いのよ。それにストーカーだなんて許せないし。ね？小町」

「うん！お兄ちゃんだけじゃ心配だしね」

そんな話をしながら女だけで盛り上がっている。三人集まれば姦とは良く言ったものだ。話の中で何故か弄られたりされているが気にしたところでどうにもならないだろう。

家に着くと自然に周囲を確認してしまう。それは雪ノ下も由比ヶ浜も同じ気持ちなのだろう。一樣に外を見ている。静まり返った景色に息を呑み込んだのは誰だったか緊張が母さんにも伝わったのか中々降りようとしないう様子を見て最初に降りる。

「ほら、三人とも大丈夫だから。降りなさい」

優しく声をかけられ開けられたドアから三人とも出ていく。鍵を開けた母さんに置いていかれないように速足で着いていく。

安心できたのは、家に入ってからリビングに入った時だった。三人とも張り巡らせていた緊張の糸が切れたように座り込む。

「こりや重症ね。三人はここで休んでなさい。あと少しでご飯の仕度終わるからね。小町、手伝って？」

「はい！あ、お兄ちゃん。結衣さんと雪乃さんと手だけ洗っちゃってね！」

それだけ言うと二人は料理を途中で迎えに来てくれたらしく、包丁の音と鍋で煮込む音と匂いが部屋を満たしていた。

ぐう……。と可愛い音が由比ヶ浜から聞こえる。

「あはは、お腹すいちゃった」

照れながら言ったその顔を見ないように顔をそらし手を洗いに行くぞ、と二人に伝える。

「あ！あたしママに帰らないって言ってなかった！ちよつと電話するね！」

由比ヶ浜が電話を終えるのを待っていると何故か八幡に対して電話を渡してきた。

「その…ママが代わってってヒツキーに」

「は？え？…うちに泊まること話したのか？」

「うん…」

雪の下はこめかみを手でおさえ、八幡は今から言われるだろう言葉に嫌だと思いつつも、何だかんだでうちに泊まることを否定できなかった自分に原因があると諦めて由比ヶ浜から電話を受けとる。

「あーもしもし。比企谷です」

《ヒツキー君。ね？》

「あ、えーと…はい」

この状況で違います。とは言えず、肯定してしまう。

《話すのは二度目になるかしら？》

「は、はあ…」

思っていたよりもテンションが高い。というより、初めて由比ヶ浜の家に行ったときと然程変わらないテンションの高さに驚いてしまふ。

《結衣がお泊まりだなんて、またゆきのんちゃんの家かな？って思ったらヒツキー君の家って言って驚いたわ〜♪》

「あはは」

それは八幡が一番驚きました、と隣で心配そうに見ている由比ヶ浜

を睨む。

「うう、ゆきのん。ヒツキーが怖いよ…。」

「由比ヶ浜さん… 今回ののは完全に貴女が悪いわ」

《一度ちゃんとお話してみたかったのよ。こんな機会でもないとおの子話させてくれないから》

《あ、先ずはそうね。遅れてしまいましたが。あの子を結衣とサブレを助けてくれてありがとうございます》

「…悪い。雪ノ下、由比ヶ浜と一緒に小町と母さんの所に行つてくれるか？ すいません。少し場所変えます」

「分かったわ、由比ヶ浜さん。行きましょ」

「う、うん。ごめんね、ヒツキー」

《あら、ゆきのんちゃんもいるのね？ ふふ、モテモテね、結衣も大変ね》

「… そんなんじゃないですよ。それより俺の部屋まで来ましたのと言いますが、あれは体が勝手に動いただけです。別に由比ヶ浜のペットだと知つてて助けたとかじゃないんで。気にしないでください。それに由比ヶ浜からお礼ちゃんと言いましたから」

《ふふ、結衣の言つて通り優しいのね》

「由比ヶ浜がどう言つたのか知りませんが、俺は優しくなんてありませんよ。ただ自分が一番好きただけです」

そう、あの時も自分が後々しなかつたから、やっていけば、そう思うのが嫌だつたからやつただけだ。自分の為によつたことだ、誉められたくてやつたわけじゃない。

《それでもよ。それにあの子のクッキー食べてくれたんでしょ？ 最初から、あれを食べられるなんて凄いなと思わよ？ 私は、まだ止めておきなさいって言つただけだね》

「… 勿体無いから食べただけです。それに、無理すれば食べられる味でしたから」

《あの子も努力してたわ。きつとヒツキー君のおかげだね》

「それは違いますよ。俺じゃなくて雪ノ下のおかげです。あいつらは友達ですから」

《ゆきのんちゃんね？確かにあの子にも感謝してるわ。泊まりに来てくれたときに何度か話したけど良い子ね。ほんと、結衣はいい友達を持ったわ》

「そつすね」

《ヒツキー君もよ？》

「…」

俺は違います。とは言えなかった。由比ヶ浜の母親だからか？分らない。でも、きつと三人で水族館に行ったとき、八幡の中で何か変わったのは確かだった。

《ふふ、結衣の事お願いね。何か怯えているみたいだったから》

「… 男の家に泊めても良いんですか？」

《ヒツキー君なら構わないわよ？なんなら押し倒してくれちゃっても良いわよ？》

「冗談でも言っていないことがありますよ？」

《ふふ、責任取ってくれるのなら構わないと思うけど、まだ早いかしらね？》

「俺には荷が重すぎますね」

《そう、でも。結衣の事よろしくお願いしますね。きつとヒツキー君の近くにいた方があの子も安心だと思うから》

「… 何も出来ませんよ、俺は」

《何かしてくれようと思ってくれただけで十分よ。結衣も嬉しいはず。それじゃあ、結衣によろしくね♪》

通話は途絶え、重い足取りのままリビングに戻ると皆席についていた。料理は並んでるので待っていてくれたのだろう。

「ひ、ヒツキー… どうだった？」

「ん？ああ、よろしくお願いします。だとき、良くわからんが任せられた」

「ママ… アリガトウ」

由比ヶ浜に携帯を返すと聞き取れなかったが何か言っていた気がするが小町の隣に座る。

「さて！お腹空いたと思うからじゃんじゃん食べてね！」

「お兄ちゃん遅いから、お腹空いちやっただよ！」

「いや、待っててくれなくても良かったんだぞ？」

「由比ヶ浜さんが比企谷君が来るまで食べないって言うから待ってたのよ」

その言葉に焦り出す由比ヶ浜だが、適当に答えて料理を口に運ぶ。普段は小町と二人の夕食だからか、賑やかな食事でも悪くないと思ってしまうのは。

「ご飯も食べ終わり、母さんは寝室に。雪ノ下と由比ヶ浜は小町の部屋に行って眠る筈だったのだが。」

「俺今から寝るところだったんだけど？」

現在は夜の10時だ。寝るには少し速いが疲れたので瞼も重かったのである。そんななか、何故か小町と由比ヶ浜と雪ノ下が部屋に入ってきたのだ。小町の部屋には鍵が付いているが俺の部屋には付いておらずプライバシーも何もあつたものではない。

「寝る前にすることがあるでしょ？」

「は？いや何もないだろ？」

「今日の依頼の事だよ」

いや、その話するなら小町いたら不味いだろ？そう思ったが小町は既に内容を半分知ってるのか七不思議とか念仏の如く唱えている。

「あれは受けないんだろ？」

そもそも、雪ノ下のマンションで起きたことを鑑みれば完全にヤバイ奴である。受けないのが普通だ。というより、学校側に相談した方がいいだろう。

「その話でね。気になったからあたし、いろはちゃんにどんな子なのか聞こうとしてメール送ってたんだけど……いろはちゃん、そんな子知らないって」

その言葉で背筋が寒くなるが、一色が知らなかっただけで、いる可能性はある。それに本当に一色と同じクラスだという証拠はない。なんせ名前すら知らないのだ。容姿だけでは探しようがない。

「女子生徒が嘘をついた可能性もあるだろ？」

「それは……そうかもだけど」

「でも、そうね。気になるというのが本音かしら」
「気になる、ね・・・ かなり危険だと思うが」

七不思議を知ることが危険というより、関わって何をされるかわからない。という意味で危険だと思う。だが女子生徒が奉仕部から出ていく時に言った『見付けてくれることを期待していますよ』言葉が気にはなっていた。

「それでね、学校の裏掲示板に何か無いかと思って探したらあったの。七不思議。勿論全部ってわけじゃないんだけど・・・」

「お兄ちゃん、お兄ちゃん。今回の事だけどね。小町も嫌な予感がするんだ」

嫌な予感はしている。きつと、雪ノ下達も同じ気持ちだろう。だから何かをしないでこのままにはしたくないのだろう。例え、調べて何も起こらないとしても。

「分かった・・・ 調べれば良いんだろ？」

「うん！」

「それでは、纏めましょうか」

「あ、小町。紙とペン用意しますね！」

七不思議★纏め★

- 1 トイレの花子さん。
- 2 歩く二宮金次郎像。
- 3 四時四十四分四十四秒の鏡。
- 4 踊る人体標本。
- 5 カナコさん。

「・・・ 一つ聞いていいか？」

「何？ヒツキー」

「うちの高校に二ノ宮金次郎像なんてあったか？」

「無いわね。トイレの花子さんの噂も聞いたことが無いけれど」

「なんかこれぞ定番って感じがしますね」

だが、この中で一つだけ。異彩を放っている七不思議があった。
「カナコさんって誰だ？」

「んーあたしも分かんないけど。掲示板には書き込みされてたから、誰かがしたんだと思うけど」

「私も聞いたことがないわね…。それに一般的には無いようよ。調べてもカナコさん、なんて出てこないわ」

明日は丁度土曜日で学校は休みだ。

「明日1日各々で、カナコさんについて調べてみるか」

「そうね、何かわかるかも知れないわ」

「うん！」

「小町も頑張ってみます！」

今日はここで解散になり各々思うこともあるだろうが目を閉じる。忘れられない一日を忘れられるように動くために。